きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第21話

水野　スウ

国会と伴走中

特定のイデオロギーとも政党とも、まったく関係ない一市民の私なんだけど、今年の5月以降、まるで国会と連動＆伴走してるような奇妙な感覚の中にいます。

テレビで中継される安保法案国会をにらみながら、フェイスブックでマスコミ以外の情報を追いかけながら、毎日がなんと駆け足で過ぎていくことだろう。本来の私は、こんなあわただしい暮らしをちっとも望んでいないはずなのにねぇ。

その間、「ミニとくべつ紅茶の時間」で「けんぽうかふぇ」をひらいたり、憲法のお話の出前に行ったり、ピースウォーク金沢の仲間によびかけて、安保法案に対する意見を道行く人に訊くシール投票や、法案への意思表示をするピーススタンディング、などなど、金沢の街でもいろんな人がこの法案に関心や疑問を持っているよ！ってこと、なんとか可視化したくて、あれやこれやと仲間たちと行動する日々が続いています。

私たちの自由と権利は、私たちの普段からの不断の努力によって保たなきゃならない、と書かれている憲法12条。その12条の実践が、今ほど必要と強く感じる時はありません。

臨時ピース紅茶

この安保法案、衆院特別委員会で強行採決される日が7月15日になりそうと知った時、その日はたまたま「紅茶の時間」と重なる水曜日だけども、こんな一大事の日、わが家でおとなしく紅茶ひらいてるってわけにはいかないぞ、と急遽、「臨時ピース紅茶します！　紅茶に来ようと思ってる人、いつもシール投票やスタンディングしている金沢四高記念公園までどうぞ来て下さい」と、メールやFBで呼びかけました。

その日は、以前から公園の前で、九条の会・石川ネットをはじめ、いくつもの平和団体が共同で

ピーステントをはっているし、同じ日に近くで、金沢弁護士会の弁護士さんたちが、安保法案のシール投票行動をする日でもあり。この法案に関心を持つ県内さまざまなグループの人たちが、はからずもその公園に集合することとなりました。

私が臨時紅茶を思いついたのとほぼ同じ頃、ピースウォークつながりの若いママからFBで、「せいじをかたろう、ママの会、をはじめます」という知らせが入りました。これまた同じく15日、同じ公園に集まって、ママ同士、日ごろ話しにくい政治のこと、安保法案のこと、語りあおうよ、というもの。ところが、そのママたち、想いがいっぱいあって呼びかけてはみたものの、気づいたら中心メンバーの誰一人、早い時間からは公園に来れないことが判明（笑）。

「スウさーん、そういうわけで、もしも早目に公園にいって紅茶してるなら、集まってくるママたちのこと、よろしくお願いしまーす」と追伸が届きました。もともと午後から紅茶をするつもりでいたから、もちろんOKだよ、と返事。

このあたり、日ごろからピースウォークその他で一緒に行動しているからこその、連係プレー。ましてや、ママたちが立ち上がって、せいじをかたろう、って会をつくったのです。これはおとなとしてできることで応援しなくちゃね、という気になって当然です。

強行採決の日に、金沢の公園で

約束の時間よりも早めに公園について、目印がわりのピース旗をひろげ、顔なじみの紅茶仲間を迎えていると、赤ちゃんを抱っこした若いママが、きょろきょろ誰かを探しながら心細げな表情で近づいてきました。「あの〜、フェイスブック見てきたんですけど、ここで、いいんでしょうか……」。彼女に続いて、幼子かかえたママたちが、次々、公園に集まってきます。

赤ちゃん抱っこしたままじゃ、おしゃべりするのも大変だよね、と、四高記念館（金沢の旧第四高等学校が、今は記念館として市民に開放されている）前の芝生にちらばっていた椅子を全部集めて大きな輪にして、みんな座って、それから一人ひとりに、今日はどうしてここに来ようと思ったの？と訊くことから、語りあいがはじまっていきました。たった数時間前、国会で安保法案が強行採決されたというまさにそのタイミングで。

「安保法案や集団的自衛権のこと、何が何だかよくわからないけど、とっても不安でたまらない」
「とにかく、反対！って言いたくて、今日ここに来ました」
「午前中の審議もNHKは中継しないで、いきなり採決のとこだけ見せる、これってひどい」
「こういう話、ママ友とホントはしたいけど、しゅうだんてき、とか、あんぽ、っていって、もし退かれたらと思うとこわくてできない、余計にもやもやしちゃう」
「ダンナさんとこんな話ができないのが悲しい。自分でよくわかってないから話が続かなくて、言い返されたら何も言えなくて」
「もっと知らなくちゃいけないと思うけど、どうやって知ったらいいんだろう」
「本当は2人目がほしい。でも安倍さんがこんな法案通そうとしてるから、不安で産めない。少子化なのに国はまったく逆のことしてるよね」

どの人もみんな、自分の言葉を持っている。今の政治や安保法案の一つ一つはよくわからなくても、なんかヤダな、感じ悪いな、このこと誰かと話したい、って強烈に思っている。メールやFBだけでなく、生身でじかに顔をあわせて、不安を不安としてそのまま吐き出せる場を、必死に欲している。そんなママたちの想いが、ひしひしと伝わって来ます。

公園に集まったママたちは、私の娘と同年代。私が紅茶の時間をはじめた年齢ともほぼ同じ。だからなおのこと、まだうまく言葉にならない不安にも、危機感にも、こころから共感するのです。

話し合いの最中、遅れてごめんね！と到着したのが、「せいじをかたろう」と呼びかけたママの一人。2人の幼子をかかえて、みんながこの日、こんなに集まってくれたことに感謝しつつ、率直に、熱く、語ります。

「テレビやごはんの話をふだんするみたいに、政治の話もごくふつうにしたいし、知らなきゃいけない、って思う。こんな話、もっともっとあたりまえにしたい。関係ない人なんて一人もいないんだから！」

うん、きぱっと自分のきもちを言ってて、いいなあ。偶然にも彼女、娘の小学校の同級生でした。

ここに、はじめの一歩を踏み出した「新しいひと」たちがこんなにいっぱいいる。私は彼女たちよりずっと先輩の一人としてただそこにいて、ママたちの話を聴きながら、ああ、今日は国会で歴史に残るひどい政治が行われた日だけども、そのおかげで生まれた、新しいひとたちのつくる希望の種が、ここにはあるよ、って感じていました。

「こんな話、もっともっとあたりまえにしたい」。彼女の言う通りです。今、国がしていること、しようとしていることに対して、もっと知ろうとすること、自主規制しないでおかしいことをおかしいということ、こういう話をあたりまえに語れる場をつくること、ふやすこと、一人ひとりが本気で「12条をする」こと、それが民主主義をつくっていくことだろう、と私は思います。

若いママたちの言葉に耳を傾ける紅茶仲間は、私より年下の人も含めてみな、彼女たちの親世代。ママたちの不安はそのまま、自分の娘や息子たちへの想いとも重なります。

この日たまたま仕事が休み、FBを見て、金沢の街なかで紅茶をしていると知って、京都の紅茶仲間が日帰りで駆けつけました。彼女もまた、この重大な一日を京都でのんびり休養するより、久々の紅茶に来て、自分なりの意思表示をして、私たちと一緒の時間を過ごしたかったのだといいます。

石川子ども文庫連絡会のお母さんたちは「おじいさんのできること」という長編大型紙芝居を持参して、ピーステントの前で読みきかせをしてくれました。

この紙芝居、ときわひろみさんという方の四半世紀以上前の作品。朝の新聞を読んで水爆実験が行われると知った一人のおじいさんが、「おじいさんのできること」と言って立ち上がり、「核戦争に反対します」と書いたプラカードをつくって、それを持って町を歩きはじめると、おばあさんがその後ろから「おじいさんのできること、おばあさんにもできること」と言って続き、それを見たお母さんが「お母さんにもできること」と言って後ろを歩き、それを見たおばさんが、お兄さんが……というふうにどんどん人の列が長くなっていく、という物語です。この日は、10数人の人たちがこの紙芝居の輪読をしました。

(*) 紙芝居の冒頭の動画が公開されています。
https://www.youtube.com/watch?v=xDeiaSEQpvc

ピーステントの人たちや金沢の弁護士さんたち、個々人で集まった人たち、いろんな年齢層の人たちと共有した分、この日あったことを、私はずっと忘れないでいられるはず。この日の臨時ピース紅茶は、めったにないほどの濃い時間を、安保法案に反対する多くの人たちと分かちあった日になりました。

私たちの声を届けようプロジェクト

「せいじをかたろう」と呼びかけたママたちは、その日の夕方、公園から自民党県連事務所に直行したそうです。自分たちのはもとより、この日初めて言葉を交わしたママたちのきもちも、じかに自民党に伝えに行こうと決めて、即、実行。アポなしで。でも事務所にはもう誰もいなくて、きもちは宙ぶらりん、モヤモヤ倍増。

彼女たちのすごいところ。もうその翌日には、「だれの子どももころさせない」を合い言葉に京都で

はじまった「安保関連法案に反対するママの会」に呼応して、「ママの会@石川」を立ち上げていました。そして、自分たちが不安に思っていること、疑問に思っていることをちゃんと表明しよう、と「私たちの声を石川の議員さんに届けよう」プロジェクトを思いつき、早速動きだしたのです。

FBのグループ内でプロジェクト呼びかけの文案を練り、それができるなりFBのイベントページで告知し、おのおので広めて、強行採決の日に公園で出会ったママたちにも知らせ、同時に、わが子の通う保育園幼稚園のママたちや、平和サークルのイベント会場で、「声を届けよう」のちらしを手渡していく、という行動の素早さ。

その呼びかけ文はこんなふうです。

「私たちの声を石川の議員さんへ届けよう！」プロジェクトを始めます！　ぜひ、皆さんの声を届けていきたいので、参加してもらえたら嬉しいです！
「安保法制」日本の国のあり方を大きく変える法律が、衆議院で可決されてしまいました。採決後に、委員会を取り仕切った浜田委員長が「政府として（法案）を十本束ねたのは、いかがなものかと思っている。」と記者団に述べたのがとても印象的でした。
今、法律をつくる立場の人たちにも、もやもやとした、いろんな思いがあると思います。
ほんとにこれでいいのか？　今こそ、議員さんたちの考えを聞きたいし、私たちの声も聞いて欲しい。
どんな未来でも、せめて「十分考えて、その結果みんなで選んだ」ものであってほしい。
今のままではあまりにモヤモヤなまま、子どもたちによくわからない未来を押し付けることになるのが、心配です。
そこで、皆さんの「ここが知りたい！　ここが不安！　私はこう思ってる！」などを文章にして届けませんか？　その声をまとめて地元の議員さんに届けます。
なんとか、一緒に考えてもらいましょう。
☆議員さんへの質問もぜひ。お返事を取りまとめてどこかで公開できるようにやってみます。☆正直で丁寧な文章でお願いします。乱暴なものは仲介できません。

「安保関連法案に反対するママの会」は全国に生まれているけど、この、「声を届けようプロジェクト」は石川が初の取り組み、ということで大きな新聞記事にもなりました（このあたり、日ごろからピースウォーク金沢が記者さんたちとつながっているので、連係プレーができる）。今後は他県でも、このような取り組みをはじめるところがでてくる、と予想されています。現に、福井にできた「反対するママの会」は、石川のお母さん達の呼びかけ文を参考にして、「私たちの声を福井の議員さんに届けよう」プロジェクトをスタートさせたところです。

スタートしてから20日間で、4歳から80代の方まで、県内から180通をこえる「私たちの声」が寄せられました。順次、県選出の国会議員さんに届けられていきます。どうか私たちの疑問に答えてください、できることなら、議員さんと対話したいです、という要望書も添えて。

国会議員の事務所や県連事務所を次々訪ねるうちに、先生と呼ばれる議員さんの政治姿勢も、直接は会えなくても事務所で対応する秘書さんの言動を通して、そこはかとなく見えてくる。遠かった政治がどんどん近くなっていきます。

子連れで民主党県連事務所も訪ねて、元国会議員さんや県議、市議さんたちに、たっぷり話を聴いてもらいました。ちかぢか、岡田党首が金沢にきて、弁護士や学生たちと少人数で座談会をする予定、その席に、「ママの会」からもどうぞ参加してください、というご招待までとりつけました。

「私たちの声を届けよう」プロジェクトの応援団である私も、行けるときは彼女たちと一緒に議員事務所に行きますが、主役はあくまでも子育て

中のママたち。議員さんを前にして胸バクバクさせながらも、懸命にきもちを言葉にして伝えようと努力している姿を、私はまるで母親みたいなきもちで、脇から見守っているのです。

民主主義ってなんだ

安保法案を本当に止めたいと、国会前で、毎週金曜日に抗議行動を続けているSEALDs（自由で民主的な日本を守るための、学生による緊急アクション、その英語の頭文字をとって、シールズ）。彼らのもとに、6月4日の国会憲法審査会で、安保法案は憲法違反という意見を述べた憲法学者の小林節さんがやって来て、激励と連帯のスピーチをしました。

それと相前後して、多くの憲法学者さんやジャンルを超えた学者さんたちも違憲の声明に名前を連ね、7月30日の「学生と学者の緊急共同行動」では、SEALDsと学者さんたちとでシンポジウムをひらき、その後、一緒に並んでデモをして、夜には国会前で抗議行動をしました。

その緊急行動をともにした憲法学者の水島朝穂さんが、国会前でスピーチ。その水島さんの言葉を、市民メディアのIWJ（Independent Web Journal）さんが全文書きおこしてくださっています。

(*) http://iwj.co.jp/wj/open/archives/255866

「早稲田大学の水島です。今、全国憲法研究会の代表をしています。
さっきから『憲法を守れ、守れ』と言われていると…我々はそれで飯を食っております。飯を食っている人間がここに来ないのは、やっぱりヤバイ、ということで学者の会呼びかけ人ですけど、今日、初めて来まして、感動しました。
何に感動したかというと、ずーっと砂防会館からデモをやってきた時、今コールしていた彼が（SEALDs奥田愛基さん）が、『民主主義って何だ』って言ったんです。そしたら、その後（みんなが）『これだ』って言ったんですよ。
それを見た瞬間（思い出したのは）、私は24年前、東ベルリンに住んでいて、壁が崩れるときの一年半前に行きました。あの時、壁を崩した市民勢力が最初、89年の9月4日に、ライプツィヒで権利を求めてデモをやったんです。でも、みんな怖くて来なかった。でも1000人が集まった。
『就職に響くぞ』『大学退学だぞ』…いろいろと秘密警察が脅したんですよ。『じゃあ、月曜日にもう一回集まろう』『ダメだよ、会社クビになるわ』…でもみんな行った。そしたら5000人になってた。
そして10月2日、2万人になった。10月9日、7万人になった――。
それを見たベルリンの人たちが『俺たちもやろうじゃないか』と言ったんです。89年の11月4日の土曜日に、アレクサンダー広場という、私が住んでいた目の前にある広場に集まろうと。呼びかけたのは俳優とアーティストと作家です。『おもしろそうだ』ってみんな思った。
もう一つあるんです。警察にちゃんと許可をもらった。東ドイツはデモをしてはいけないんですよ。でも芸術家の集会だから警察が簡単にハンコを押しちゃった。
さぁ集まった。100万人が集まった！
そして弾圧された政治指導者が立ち上がって、『We are the People』って言ったんですよ。俺たちが人民だ、と。この東ドイツの体制は人民民主主義。『ドイツ民主共和国』なんて嘘っぱちじゃないか、俺たちは壁の向こうに行けないじゃないか、行かせてくれ！と叫んだんですよ。
そしてその11月4日の大デモンストレーションの後、5日後にベルリンの壁が崩れたんです。これはどういうことを意味していますか？
最初はベルリンの壁は崩れてなかったんです。一番最初は、小さな小さなデモから始まった。でも『定期的に月曜日に集まろうね』と、ど

んどん膨らんで、ついに100万人になったんですよ。
私はそこに住んでいて、上から見て、そこには100万人も入れません。『“100万人”は嘘ですよ』と新聞は書いた。当たり前だよ。せいぜい10万人くらいですよ。でも違うんですよ。そこに向かって電車に乗り、車で、徒歩で一杯集まってきた人、ひっくるめて100万人なんです。
だから、ここにいるのが2万だとか3万だとか、砂防会館に4000だとか、明日の夕刊フジや産経新聞が書くんですよ。でも、その向こうに1000万、2000万の国民が見ているんです。だから8割の国民が納得していないじゃない。
8割の国民が納得していない政権は、退陣願いましょうよ。
今日の夜10時から、NHK第一放送、NHKジャーナルに出演してこのデモのことを話します。
今、新しい民主主義が国会前で始まっている。それはなにか。今まで私が、45年前、高校生でここでデモをやった時、どっちかというと後ろからついていったデモだったんですけど、全然違うの。今日、先頭で、学生といわゆる学者が一緒に歩いたんですよ。
そして、『民主主義って何だ』って彼らが問うたら、『これだ』と言ったんですよ。私、初めて、憲法やって33年、飯食って来ましたが、今日、初めて、憲法って何だって分かりました。
これなんですよ。
俺たちが人民なんです。だから、それに反対するあそこにいる政権には退陣を願いましょう。廃案しかない。廃案しかあり得ない。がんばりましょう」

（原佑介「【スピーチ全文掲載】『憲法で33年飯を食って来たが、今日、初めて何が憲法かが分かった。これなんですよ！』水島朝穂教授がSEALDs集会で熱弁 ～ベルリンの壁崩壊直前のドイツと国会前が今、重なる」http://iwj.co.jp/wj/open/archives/255866（IWJ Independent Web Journal　2015年7月30日）

憲法を長年、研究していらした水島さんをして、はじめて憲法が何かわかった、と言わしめたもの。SEALDsを中心とする若者たちの、言葉だけじゃない、実際の、不断の努力の直接行動を見て、そこにご自分も飛び込んで参加して、民主主義って何だ、これだ！と水島さんは感じられたのだと思います。

SEALDsよりさらに若い、10代の高校生が「ティーンズソウルデモ」を、続いて、中学生も声をあげ、「反対するママの会」はその後も全国各地で次々に生まれ、いくつもの大学有志の会がそれぞれの反対声明を出し（金沢大学からも出ました）、与党公明党の支持母体の創価学会からも、ついに、反対の声があがりはじめました。

そして今、金沢でも若者たちが動きだしています。
SEALDsが呼びかけている、「8月23日若者全国一斉行動」をきっかけに、その同じ日、この街ではじめての行動をおこそうと決めたのです。
4人の、10代から20代の若者が中心となって、安保法案に対してなにかできることはないかとたちあげた、生まれたてのグループの名前は、TNG。Think about Next Generation。
彼らは、金沢片町のおしゃれなカフェを夕方から貸し切りにして、「Listen × Know × Talk～私たちの未来と安保法案～」がテーマのあらたな集会を今、準備している真っ最中です。
政治を語りにくい今の世の中。自分で考えはしても、なかなかまわりの人と、それを共有したり、共感するのがむずかしい。それは若者にかぎらず、家庭の主婦も、ミドルエイジのおばさんも、おじさんも、会社の男の人、女の人たちだって、そうかもしれない。
若い世代が、これは自分たちのことだと関心を

持って、政治を考える、知ろうとする、23日がそんなきっかけとなる日になればいいなあ、と思います。そんな若者たちの出現が、また、おとなたちをも勇気づけ、動かしていくでしょう。

30歳以下の参加費と、それより年上の人の参加費をかえて、おとなもシニアも、参加すると同時に応援できる仕組みをつくってくれているので、私も、彼らがあらたにつくろうとしている場を楽しみにして参加します。その日、私は福井へけんぽうかふぇの出前に行く日だけども、終わったら特急電車に飛び乗り、金沢駅から会場のカフェに直行しましょう。

「新しいひと」が生まれてる

「新しいひと」が、この国で、日々毎日、生まれているように感じます。国が民主主義をこわそうとしているので、これまで漠としてつかみどころのなかった民主主義が、逆説的にクリアに見えてきて、それを感じとった「新しいひと」たちが、関わり方の個人差はあっても、安保法案を自分事としてとらえ、一人ひとり、民主主義しはじめているように思います。

デモになんかぜったい行きそうにない人が、または、自分から政治を語るなんてこと一度もなかった人が、今、新しい自分の言葉を持ち、行動しようとしている、これってすごいこと。

川口の紅茶つながりの、実におとなしそうなお母さんが、もう7回もSEALDsの国会前行動に参加しているというのです。春にベルリンとアウシュビッツを訪ねる旅で出逢った女の子が、SEALDsのメンバーになり、初めてスピーチすると知って聞きにいってからというもの、何度も国会に行っているの、と知らせてくれました。

こんな例が私のまわりで頻発してます。ひぇ〜まさか、あの人が！　え、あの人も？　という、うれしい驚きと希望と勇気。そう、以前から動いていた人たちだけでいくら声をあげても、今の状況はかわらない。新しいひとたちの出現があってはじめて、社会は少しずつかわっていくのだと、私は信じます。

「新しいひと」が生まれてくる時に、かならずそれに冷や水をかけたい人がいること、承知しています。3度の選挙で与党にこれだけの議席を有権者が与えた以上、国のすることに今更文句をいうのはおかしい、という人や、今の動きはいっときの熱病にかかってるみたいなもんさ、という声も耳にします。

そうまで思わないとしても、何事もお上にまかせておけばいい、国が決めたのならしかたがない、選挙で勝った者が多数決で決める、それが民主主議、と思っている人もきっと大勢いるでしょう。

それでも、与党に一票入れた人たちは、この国の民主主義をこわしていいとか、立憲主義なんて無視してかまわない、とまで思って投票したのでは、おそらくないはずです。百歩譲って、集団的自衛権や安保法制に賛成する人であったとしても、こんなふうに一内閣の暴走で、この国の民主主義がこわされていっていいのだろうかと、その一点にしぼって考えてみた時、今の安倍政権のやりかたに、もの申すだけの権利と義務と責任が、私たち国民にはあると、私は思うのです。

法的安定性って

すでに多くの人がもう気づいてしまいました。安保法案の本質が、私たちのいのちと安全を守るためのものではなく、アメリカのする戦争の手伝いに、自衛隊を海外のどこへでも派遣できるようにするための法案であることに。そして今の政権は、法案を通すよりもっと大きな重大な変化を、この国にもたらそうとしていることに。

そのことをもっともよく私たちに教えてくれたのは、ほかならぬ、安保法案作成の中心メンバー、磯崎洋輔首相補佐官でした。彼はまた、自民党憲

法改正推進本部の事務局長でもあります。安保法案の衆院可決後、この法案は憲法違反だ、の声がますます高まっている時も時、この人は「法的安定性なんて関係ない」って講演会で言っちゃったのです。国民よりも、国を守ることこそ最優先、新しい法律が、法的にとか憲法的にどうこうとか、そんなの関係ない、って。

あわわわ……思わず本音を言ってしまったね、磯崎さん。新しい法律をつくる時に、法的な安定性などなくてよいなら、法律は時の政府の都合でころころかわってしまう。それでは誰も法を信用しなくなります。

そもそもが、国の未来を左右する重大な法案を通すならば、先に憲法改正を国民に問うべきです。それがむずかしいとわかったので、解釈改憲。それでもやっぱりこの安保法案、スタートの閣議決定からして無理がありすぎるから、参院で国会審議を重ねれば重ねるほど、憲法との不整合性があとからあとから。

このこと自体、法律より上に位置する憲法を軽んじていることです。主権在民を無視して、立憲主義が何か、気にも止めない人が一連の安保法案に直接かかわり、改正草案にもかかわり、私たちに国家主権を押しつけようとしている。これって、集団的自衛権は9条違反、総理大臣が憲法を守らないのは99条違反、ということよりもっと根源的な、してはならないこと。

法的安定性を重んじない安保法制をこんなやり方で通すとしたら、法治国家が成り立たないからです。こんなことを認めてしまったら、民主主義も憲法も立憲主義も、根っこからくずれてしまう。そこにこそ、私は本気で怒っているし、だからこそ、本当に止めたい、って思っているのです。

この夏の、私の宿題

マガジンに前号を書いた後、この私に今、何ができるだろう、とおおまじめに考えました。前号の内容は、私が憲法のお話の出前先で語っていることを、おおまかなレポート風にまとめたものです。

たとえば――。憲法13条の大切さを、直感で発見した娘から気づかされたこと。それをきっかけに、私が「13条のうた」をつくったこと。実はその13条こそが、日本国憲法の核心中の核心であったと、後から実感したこと。私たちのいのちや、自由、しあわせを追求し、わたしがわたしらしく生きる権利の13条を実現するためには、まずもって、決して戦争してはならないこと。

また憲法12条で、私たちには、国のすることをしっかり見ていて、国がおかしなことをしようとした時はちゃんと声をあげる、不断の努力が求められていること。「わたしの12条宣言」という文章を書いたこと。どんなささやかな12条の実践も、peaceのpiece、平和のひとかけらであって、そんなpiecesが無数に集まらない限り、もとよりpeaceはつくれないし、この流れも止められないこと。それにくわえて、自民党の憲法改正草案と今の憲法との違い、などなど。

それらはどれも、日ごろから出前けんぽうかふぇで語っていることです。ならばいっそ、前号のマガジン原稿を基に、私の伝えたい憲法を一冊のブックレットにまとめよう、それが私のできることかも、と思いつきました。

でもねぇ、これがいざ書き出してみると、9条のことは勿論はずせないし、日本国憲法のおいたちも、安保法制のことも、そして一人ひとりができる12条の具体的な実践例だって、書かないわけにはいかなくて、内容の幅がどんどんひろがっていきました。

ましてや、今この国で起きていることは、単に安保法制にとどまらず、民主主義そのものの根っこを揺らがせる大事件なものだから、そのことも、記録として記しておかないとね。と、国会審議を追いながら、あらたな原稿を書き足していく日々がえんえん続き……。

うひゃ〜、もしかして私、エライことにとっく

んじゃったかも！　途中からそう気づいたものの、これは戦後70年の夏、私に課せられた重たい宿題に違いない。この本をつくることが、今の私にとっての12条すること。そんなふうに立ち位置を確かめつつ、ようやく書きあげました。『わたしとあなたの・けんぽうBOOK』。

それにつけても、今の時代を記録する場としてのこのマガジンの存在に、私はあらためて深く感謝します。感じたこと、思ったことの種を蒔ける自由な畑が、Web上のここにあることの、なんというありがたさ。その希少価値はこれから先の時代、さらに大切なものになっていくだろうと確信しています。

2015.8.22　水野スウ